

---

# 夜行

獅子竹 鋸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜行

### 【Nコード】

N0517P

### 【作者名】

獅子竹 鋸

### 【あらすじ】

今年私を書いた短編小説です>< あまり良い出来とは言えませんが、ちょっとした震えをお届けします^^ ひまでしたらどうぞお読みくださいませw

（前書き）

ああ、悲しきかな……。いったいどうやったら文才ってかいかするんだろ。アハハ、ハハ。はい、自重です。ひょっこりできました獅子竹鋸です。思いつきで自分の短編集せちゃいました。まあ、どうか最後まで読んでくれたら嬉しいかな？

昨年の六月のことだったと記憶している。

鉄道員であつた私と田中はその日、ちょっとした宴をしていた。と言っても、私はカップ酒を、田中はノンアルコールビールを片手に愚痴を垂れる程度のものである。やれ娘がどうしたとか、給料が安いとか、まあそのようなありふれた、取るに足らないことばかりだったが、他に酒の肴になるような話題は、あいにくと持ち合わせていなかった。

宴もたけなわに差し掛かった頃、職員用の小屋の隅にある古びた置時計が午前一時を告げた。

その鐘の音は、心なしか重く、冷たく響いた気がしなくてもなかった。

「おつといけない。夜行（夜行運転の通称）の時間だ」

飲みかけたノンアルコールビールをテーブルに置きつつ、田中が呟く。

「もう少し飲んで行けよ。ちいとはかし遅くなつたていいじゃねえか」

すっかり出来上がっていた私は、けれどもいつものように田中を

引き留めようとした。

「ははは、悪いけど遠慮しておくよ。仕事はきちんと全うするものだ」

「そうかあ、じゃあ氣い付けてなあ」

小屋を出て、貨物列車の方へ歩いていく田中。

あいつはそう、真面目と言うか、仕事中毒だった。決まった時間に出勤し、列車のダイヤ通りに汽車を転がし、決まった時間に出社する。

まるでロボットだなど、酒の力で言ってしまった事もあった。

私は基本怠惰なので、たびたび肩の力を抜くようにと田中に勧めたが、あいつは決まって苦笑するばかりだった。

だから、私はあの事件の事がいつまでもしこりとなっていた。

貨物車両だけを残し、先頭の汽車と共に忽然と姿をくらました田中のニュースは、当時オカルトもふくめ、世間を賑わせた。

田中の蒸発から早一年。

私はまだ鉄道員として働いている。

そして私は今日、夜行の仕事が回ってきた。

田中が消えたルートである

午前二時三十分、月明かりも星のまたたきさえも見えない夜を、  
一列の貨物列車がひた走る。

とても、静かな夜。

聴こえるのはせき込むようなディーゼルの重低音と、レールの軋  
む音だけ。

虫の声も、風の音もない、静かな夜。

その時である。

ガクンッ！ ギギイイイイーーーーー！

列車が突然停止したのだ。

無論、何の前触れもなかったため、私は頭をしたたかに打ちすえ、  
倒れてしまった。

痛む額を抑えつつ、私は何事かと懐中電灯を手に様子を見に行く。

しかしながらエンジンなどに異常はなかった。それどころか何処  
にも異常は発見されなかった。

首をかしげる、ところの話ではなかった。

ふと、私はあたりを見渡す。

いや、耳を澄ました。

遠くこだまするエンジン音。レールをこする金属音。

「来る」

近付いて来る。

「あ、あれは……」

あいつが、近付いて来る。

「まさか、そんな……」

あいつが 田中の汽車が、近付いて来る。うなりを上げ、警笛を鳴らし猛進してくる。そして、猛スピードで私のすぐ横を通り過ぎて行き、

「き、消えた、のか……？」

違う。落ちたのだ。そんな気がした。そうとしか考えられなかった。

どうしてそう思ったかは分からないが、私はそこから動こうとはしなかった。……私は、動くことが出来なかった。

次の日、私の汽車が急停車した地点から三百メートル程先にある

鉄道橋が、崩れ落ちていたのが発見された。どうも、老朽化が進んでいたらしく、昨夜のうちに突風によって崩壊したそうだ。あのまま進んでいたら、私は間違いなく死んでいただろう。

そして、その橋の残骸に混じって、古びた汽車の模型と、人形が落ちていたのは、私しか、知らない。



（後書き）

ご愛読ありがとうございました^^  
ご意見感想おまちしておりますw

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0517p/>

---

夜行

2010年11月21日22時30分発行